



みんなで一緒に歩いていこう

被災地のみなさんをつくってきた2年間のまとめとこれから



軌跡がキセキに

その時、私たちは何を感じどう行動したのか。その思いをひもといてみましょう。



全国の生協が
緊急支援に走る



おおくほ けい
大久保 圭さん
人事総務部

被災地と全国の生協がともに緊急支援を

緊急支援のため、2011年3月18日深夜に現地に到着。みやぎ生協の職員とペアになって、わずかな支援物資を組合員宅にお届けすると、大変喜ばれました。みやぎ生協の担当者は「全国の生協から応援に来てくれています。前を向いてがんばりましょう」と組合員を元気づけていました。避難所の小学校へおにぎりの搬入に向かう途中の風景は悲惨で、その凄まじさは言葉では言い表せません。支援活動に全国の生協が駆けつけるのを見て、「困ったときはおたがいさま」のたすけあいの精神は、被災者の方々にも必ず届いていると確信しました。



1 トラックに緊急支援物資を運び入れる職員。
2 震災直後から全国の生協が支援を開始。物資と職員をのせた各地のトラックが被災地に。
3 大久保さんの見た被災地。宮城県塩釜市北浜地区の信号は消えたまま。



愛知と気仙の
様々な団体が
力をよせあって

愛知と気仙共同して支援活動に取り組む

「地域の人と長期的かつ実情に即した支援が大切」というNPO愛知ネットの提案で、気仙地域の市民活動団体に呼びかけ2011年4月「気仙市民復興連絡会」を立ち上げました。NPO愛知ネットと情報共有して活動する中、コープあいちに出会い、炊き出し、ボランティア派遣、支援タオル、学びと交流のツアーへとかわりは広がっていきました。交流の中で同じ人間として互いに学べたことが大きな成果でした。さらに、こうした得意分野を生かし合う団体どうしの連携の大切さは今後に生きる経験でした。



被災した三陸鉄道盛駅舎を使った「ふれあい待合室」。

NPO法人「夢ネット大船渡」は被災地の方が作った手芸品を販売し、地域の相互扶助をサポート。また、三陸鉄道の盛駅をふれあい待合室として地域の住民が集える場に、まちの活性化をすすめる。

被災者自身が復興支援活動を

NPO愛知ネットはこれまでの活動を通じて、支援には「緊急支援から地域連携、そして復興支援へ」という流れがあるということ、そして復興支援の主体は、被災地の方々であるということを学んできました。だからこそ被災地のNPOや市民グループと、一緒につながって支援活動を始めました。しかし、人・モノ・資金のとぼしい被災地での活動は大変。そんなとき、活動を全力で支えてくれたのがコープあいちでした。炊き出しの食材や職員の派遣、そして被災者一人ひとりに組合員からのタオルを手渡したり…。苦しい時に駆けつけてくれ、支えてくれたことは、被災地のNPOや被災者の心の財産になっていると思います。私たちも誇らしく、そして大変頼もしい存在でした。被災地復興まで、私たちは今後も一緒に活動を続けていきたいと思っています。

NPO愛知ネットは地域市民への防災・災害支援に関する情報サービス発信を中心に、地域ネットワークの形成や、地域の防災に対する意識向上のための活動を行っている。



あまの たけゆき
天野 竹行さん
特定非営利活動法人
NPO愛知ネット理事長

タオルでした

そんな思いをこめて、今——。
2013年4月

明日からの 動き出す力に

泣き、笑い、——ときには走って、描いた足跡を

ひろがりには23万枚の

心をあわせて 力を合わせて 一歩ずつ——
そんな気持ちで 被災地と歩いた 2年間。

はじまりは様々な出会い





いなぎ しなえ
稲垣 等恵さん
コープあいち組合員

タオルにこめた気持ちを届けるために

倉庫に山積みになっているタオルを見て、被災された方の力に少しでもなりたいたい、みんな願っていることがあらためて分かりました。繊維のほこりまみれになりながら、バスタオル、ハンドタオルなど種類別に分けて段ボールに詰めました。自分でもほしくなるような素敵なタオルも多かったです。

何通もの手紙や添えられた小さな石けんを発見するたびに組合員の温かさが感じられ、一刻でも早く現地に届くように願いながら作業しました。



1



動き出した組合員



1



3

小さなことでも続けていきたい

震災後、すぐにコープ高蔵寺で支援バザーを開催。コープ高蔵寺を拠点にしているグループが協力して取り組みました。以降も被災地の仮設住宅で「アクリルたわしが重宝している」と聞き、311枚の「いちごのアクリルたわし」を送りました。被災地の漁協へ軍手を送る活動や、店舗主催の「絆フェア」など職員と一緒に継続しています。

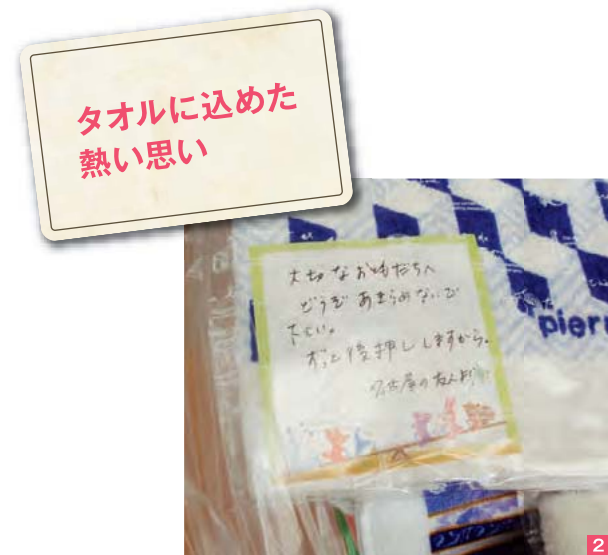
小さなことしかできませんが、支援を続けていけるようがんばりたいです。



はまだ ひろこ
浜田 弘子さん(中央)
コープあいち組合員



4



2



3

1 タオルを送るためにボランティアが仕分け作業。2 組合員からのタオルにはメッセージが。3 盛町の七夕まつりでタオルを配布。4 介護施設にタオルを届ける。



5 コープあいち組合員と椿のストラップを作りました。(2012.8)



5



4



岩手・大船渡・おもてなし隊

たむら あきよ 志田 裕子さん(中) 熊谷 仁弐さん(右)

タオルがつないだ縁。多くの人を巻き込み、太く強く

観光客に向けてボランティアガイドをしていましたが、震災で状況は一変。2011年5月、コープあいちの職員と一緒に支援タオルを配りました。バッグひとつで避難した身にタオルはありがたかったですねえ。40万人もの厚意がこもったタオルから、愛知の人に会いたいという気持ちが生まれました。タオルはコープあいちとのコミュニケーションの架け橋。ひとつの絆が多くの人を巻き込みながら、太く強くなっていきました。

震災直後は人も街も疲れ傷つき、すさんでいましたが、こうした継続した支援と交流で、少しずつですがおだやかな大船渡の街になってきたように感じています。

岩手・大船渡・おもてなし隊はボランティア観光ガイド、震災の語り部として活躍。地域の伝統食を広める活動、復興支援のため大船渡の花「椿」のストラップ作りも手がける。



1



避難所での
炊き出しを協同で

1 大船渡の避難所で炊き出し。
2 片道3時間かけて、食材を大船渡、陸前高田の避難所に運ぶ及川さん。



おいかわ としお
及川 利夫さん
店舗支援グループ

要望に合わせて支援に取り組む

2011年5月1日より、「NPO愛知ネット」と岩手地元の「気仙市民復興連絡会」の炊き出しに、コープあいちが食材を提供しました。避難所の生活では、不足しがちになる野菜。仙台のメーカーにカット野菜をつくってもらい、避難所から片道3時間かけて仙台まで取りに行っていました。

こちらから持ち込んだ「ジャンボ焼き鳥」を焼いたときには、避難所の方たちより「震災後、初めてタンパク質を食べれた」と大変喜んでもらえました。

現地では、時間の経過と共に必要物資の要望も変わり、支援することは簡単ではありませんでしたが、できることをスピード感をもって行わなくては、と思い取り組んでいました。



2



第5回



第4回

組合員の中から
芽生えたもの



第6回



第7回

被災者の声に心と耳をかたむける

未曾有の災害の被災地に立ったとき、半年を経てもなお、その惨状に息をのみ呆然としました。メディアの報道には限界があることを感じ、現地で被災者のお話しに心と耳を傾けながら、この地に立った者として終生想いを寄せ、寄り添い続けねばと思いました。



そふえ ゆうご
祖父江 裕子さん
コープあいち組合員

被災者との交流を愛知で広げたい

現地への支援ツアーが企画されていますが、参加できない方も多いと思います。そんな方々と、愛知への広域避難者や、気仙地域から愛知に来てお話しをしてくださる方々とともに、地区ごとに小さな集まりを持てるといいと思っています。自然災害から逃れることができない国土に生きる私たちは、災害への備えと覚悟を決めなければならないと思うのです。



第11回



あさい きよみ
浅井 清美さん
コープあいち組合員

忘れずにいること 人として平等に付き合うこと

被災地を見てみたい。そんな時、ふと目にとまった1枚のチラシ。これが被災地との出会いです。私たちの住むこの地で震災のことは過去のことになりつつあるころ、私は被災地へ…。そして、その地で見たものは、復興とはかけ離れたがれきの山と広大なただの土地。その地で知り得たものは、被災地の人の温かさで残された人の使命感。がれきの山も人の温かさも足を運ばなければ、知らずに過ごしてしまったことでしょう。その時の気持ちを持ち続けるのは、なかなかできることではありませんが…。忘れずにいること、人として平等に付き合うこと、これが私にできることです。



第1回

被災地から
学び交流する

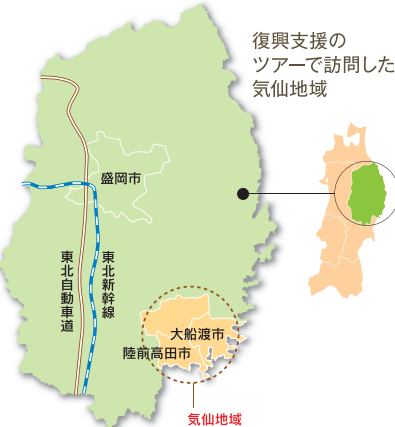


第3回

第1回のツアー。赤崎町で組合員がタオルを渡す。第2回ツアー。赤崎町で組合員がタオルを渡す。第3回ツアー。赤崎町で組合員がタオルを渡す。



第2回



被災地は命の重みが伝わります

はじめは「学びと交流のツアー」を行うことに戸惑いました。ツアーバスで仮設住宅に乗り付けたらそこでくらす人はどう感じるだろう、受け入れてくれるだろうか…。心配しながら迎えた初日、話を聞くだけの予定が、仮設住宅の中に組合員さんをお招きし、深い交流ができたんです。第1回のツアーで被災地の惨状を目にした組合員さんからは今も支援物資が届きます。みなさんに、特にこれからの日本を背負ってたつ若い方々に被災地に足を運んでいただきたい。命の重みが伝わります。いつか来る災害に備え、対策をたてていただきたいです。



さんの ちよこ
金野 千代子さん
山口地区ボランティア
グループ事務局

金野千代子さんプロフィール 山口地区仮設住宅に集会所がないため、自宅を支援物資の中継所とし、支援物資を家族構成などを配慮して配るボランティアに。「学びと交流ツアー」参加組合員や職員研修を受け入れて交流を続けている。

被災地とかかわり、学びながら地域の防災へ生かす

2011年11月のツアーに参加以来、夜行バスや新幹線で計5回、現地を訪問しました。回を重ねるたびに深まる絆、遅々として進め復興、様々に変化して起こってくる問題、知れば知るほど、ますます深くかわっていきたいと思うようになりました。ちまたでは風化して無関心になる中、これからは、「明日は我が身だ」と肝に銘じて被災地に学び、地域で防災と復興に取り組むことが何より重要だと思っています。



ひろえ
メイヤー 洋枝さん
コープあいち組合員

被災地の経験を愛知で生かしたい

「自分の目で被災地を見たい」と思う気持ちが日々強くなっていったとき、ツアーを知りました。主人は「しっかりとボランティアをして、報告をするように」とカメラを貸してくれ、長女が「食事のことは任せて」と、家族の後押しがあり参加することができました。現地の方は被災当時のようすを細かに語り、「私たちの経験を愛知での備えに生かしてほしい」と伝えてくれました。災害はいつ起こるか分からない一決して人ごとではありません。私も一つでも学んだことを実践できるようにしなければと思いました。



こんどう いくこ
近藤 育子さん
コープあいち組合員



ふるた やすこ
古田 靖子さん
名東センター

福島県の桃のいいところをお知らせしたかった

「福島県の桃」の学習会を職場内で行いました。商品部の方から「福島県は桃の名産地で、とてもおいしくて良い桃。だけど、原発事故後は風評被害に苦しんでいます」と聞きました。

組合員みなさんへは「福島県の桃」の取り組みを貼ったボードを見せながら、①放射性物質の検査をしっかりと行い、安全が確認されていること ②味がとってもおいしいこと ③「多くの方々に桃を食べしてほしい」という生産者のみなさんの気持ちでお手頃な値段であるということをお伝えしました。

みんなの利用で生産者のみなさんへの応援にもなるし、桃が安全であることを知ってほしいと思いながら話しました。組合員からも、「応援しなきゃね」「おいしかったよ」という言葉をいただきました。



1 桃を利用した組合員から生産者へのメッセージ。

商品の利用をおすすめして

心のキャッチボールが励みになって

うちだ しゅいち
内田 珠一さん（ぜんぎょれん食品）

震災から2年、会社の存続をかけて、社員と力を合わせて、組合員みなさんにおいしく食べていただける商品をつくっていきたくと思っています。

ただ、まだまだ復興に時間もかかります。そんな厳しい状況の中、三陸で揚がる鮮魚のサンマを通して組合員みなさんと気持ちのキャッチボールができたことは、私も含め担当者一同非常に励みになっています。サンマの加工品についても準備もすすめていますので、今後ともご支援をお願いいたします。



2

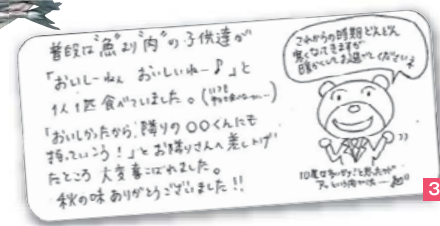
「おいしかったよ」の声を届けて

てづか あけみ
手塚 明美さん（新城センター）

三陸のサンマのおすすめをし、多くの組合員から「新鮮で本当においしかった」「来年も利用したい!」と声をもらいました。

このたくさんの声を、生産者の方々にメッセージカードにして直接お渡ししました。生産者の「がんばってるよ」というニコニコの笑顔にふれ、「これからもっと組合員と生産者をつないでいきたい」と思いました。

2 ぜんぎょれん食品の内田珠一代表に組合員からのメッセージを手渡した。（手塚明美さん） 3 サンマを利用した組合員から生産者へのメッセージ。



3



2



1

まつりをとおして交流が広がる



3

3 陸前高田うごく七夕まつり会場での合同慰霊祭。（2012.8）

震災から4カ月 それでも祭りを

大船渡市盛町（さかりまち）の七夕祭りは、先祖の魂を鎮める意味も持つ伝統行事。2011年は街全体が被災し、みな生活や仕事で精一杯。2基の山車も壊れてしまい正直開催は無理だと思いました。しかし、安城七夕まつり協賛会やNPO愛知ネット・コープあいちなどのバックアップもあり、例年通り実施にこぎつけました。地元の人はもちろんですが、ボランティアに入ってくれていたみなさんに喜んでもらったのがよかったです。愛知の人々とのつながりが生まれたのもうれしいですね。



もんだ こうめい
門田 晃明さん
盛青年商工会

プロフィール 2011年から2013年3月まで盛青年商工会代表。2012年には安城市の高校で講演するなど愛知とのつながりも生まれている。

離れた二つの街の七夕をつなぐ

「七夕まつり」のあるまちを手助けしたいと、2年続けて盛町にボランティアを派遣しました。

同じ七夕でも「願いごと」の安城と「鎮魂」の盛町ではバックボーンが異なることが驚きでした。また、心のふれあいを持つことで被災者の気持ちを知り、我々にとってかけがえのない経験となっています。そうした交流の中で、結果的に現地の方に喜んでいただき、復興の一助になれたら幸いです。



こじま しょうじ
小島 祥次さん
安城七夕まつり協賛会
実行委員

2年間の軌跡 DATA

支援募金の今まで

●2011年度 義援金…
1億3687万8846円
（災害緊急支援基金
70万円含む）

●2011年度
被災生協への見舞金…
492万7800円



●「安心して住める
『福島』を取り戻す
ための署名」への
協力… **4万1562筆**

●2012年度 支援募金
「学校図書館げんき
プロジェクト」支援募金…
35万5700円

「食の安全を守るための
放射線測定器30台の購入と
内部被ばくを検査するための
装置2台の購入」支援募金…
79万4192円

「福島子ども保養
プロジェクト」支援募金…
80万3683円

●2012年度 復興支援活動募金
組合員からの募金額…
236万5836円

【活用した取り組み】
被災地移動店舗車募金への協力
（いわて生協）… **100万円**
（職員研修で、いわて生協店舗で実施した
供給活動から一部（5万円）を送金）

被災地の児童・生徒のための「思い
出作り＝心の支援活動」への義捐金
協力（みやぎ生協）… **30万円**

「クリスマスカードを贈る取り組み」
への協力（いわて生協）… **20万円**
（カード2,000枚分：カード1枚100円のお菓子代）

「ひなまつりカードを贈る取り組み」
への協力（いわて生協）… **2万9900円**
（カード299枚分：カード1枚100円のお菓子代）

2012年度「利用で つなぐ復興・再生」

●福島県JA伊達みらいの桃
…約**11万玉**
（8月企画（共同購入と店舗の合計））

●三陸の鮮魚サンマ… 約**5万尾**
（9月企画（共同購入と店舗の合計））
共同購入は10尾企画

●がんばろう日本商品の利用
（12号3月4回～13号3月3回）
企画商品数… **602アイテム**
利用点数… **785万6425点**
利用金額… **24億8898万1453円**

たくさんの利用で、
被災地の産業・経済の復興に
役立つことができました。



●店舗絆フェア… **10回**開催（2月末まで）
製造者・取引先… **26**
取扱商品… **のべ45品**
利用点数… **1万9684点**
利用金額… **653万7562円**



コープ高蔵寺の絆フェア

岩手県気仙地域を中心とした復興支援活動

●支援タオル… **約23万枚**

●復興支援ツアー参加者… **のべ270名**
（2011年10月～2012年11月）

あなたがつなぐ復興支援～タオルがつなぐ支援企画
第1回…2011年10月28日～30日
第2回…2011年11月9日～11日

春休み現地交流in気仙
第3回…2012年3月28日～31日

想いをつなぐ地域交流with三陸気仙
第4回…2012年5月14日～16日
第5回…2012年5月25日～27日
第6回…2012年6月2日～4日
第7回…2012年7月21日～23日

夏まつり交流with三陸気仙
第8回…2012年8月3日～6日
第9回…2012年8月5日～8日

学びと交流with三陸気仙
第10回…2012年10月20日～22日
第11回…2012年11月9日～11日

2011年度の支援活動

●支援活動… **のべ643日**
（組合員参加を加えるとのべ720日）

●費用… **1161万5000円**
（人件費除く）



愛知での備え

●自治体との災害時
支援協定の締結… **29自治体**



自治体と一緒に防災訓練



クリスマスカードの交流でみんなの心があたたまりました



組合員の思いがこもったクリスマスカード。
(2011)

岩手でカードを受け取った方 からのお礼のメール

クリスマスカードありがとうございます。豊川市のT君から、クリスマスカードを頂きました。開けた瞬間、中3の息子が小さい頃一緒にぬりえをした事を思い出し、笑みがこぼれました。ありがとうございました。

コープあいちの組合員より

- クリスマスカードでの交流は、送る側も受け取る方々も気持ちでつながり、さらにそのようすを読んだ私も心が温まりました。「顔の見える、心の通う交流」復興支援にはとても大切なことだと思いました。
- 組合員から組合員へのたすけあい、つながり、協同を感じました。
- ウィズコープミニに、クリスマスカードを受け取られた方からのメッセージが紹介されていたのがよかった。やっぱり「無事に届いたのかなー」「喜んでもら

えたかなー」って気になります。だから受け取った方の声が聞けるとホッとするというか「ああよかった。また次の機会を探して何かできることをしよう」と思います。

- みなさんの素敵なクリスマスカードを見て素晴らしい、またこのような企画がありましたらぜひ出したいと思いました。復興支援はみなさん知恵を出し合って色々されているのでほんとにすばらしいです。政治家の方たちもしっかりしてほしいと思います。



クリスマスカードに折り鶴をセットしたいわて生協の気仙地域の組合員。(2011)



全国から届いたクリスマスカードにクッキーをそえて。(2012.12)



クリスマスカードを共同購入で組合員に手渡し。(2012.12)



組合員と気仙地域のみなさんとの交流。

人とひとをつないで

震災後、被災地域のコミュニティづくりとして力を入れてきたのが「ふれあいサロンお茶っこ会」です。お茶を飲みながらおしゃべりしたり手芸や手遊びを楽しんだり…。ものづくりが好まれています。何もかもなくなつたから、自分の手で何かつくりたいと思う人が多いのです。まだまだ大変な状況のなか、ほっとできたり人とふれあえる場です。被災した人の心の支えの一つになればと、「カード」を贈る活動も



七夕カード

いわて生活協同組合 監事 被災地支援担当

飯塚郁子さん

続けたいのは、寄り添うこと

震災から2年。
私たちが「今」、いだいているものは、どんな想いなのでしょう。

続けてきました。昨年12月にお届けしたクリスマスカードは5000枚。コープあいちのみなさんもたくさん送ってくれましたよね。手にしたおじいちゃんたちは互いのカードを見せ合ってニコニコ眺めていました。温かい気持ちが伝わったんですね。また、買い物支援事業として、コープあいちにも車両導入支援をいただいた「移動店舗」を実施してきました。交通の便の悪い仮設住宅をまわります。移動店舗車が着く時間になると、外に出て待つ人もいらっしやるほど。そこで利用者が顔見知りになり、会話が生まれています。「移動店舗が来てくれてうれしい」と聞くと、自分のことのようにうれしいですね。

アイデアをください!

「お茶っこ」では、「こういうものを作ってみたら?」「こんなゲームは?」「こんな材料を提供できるよ」というみなさんのアイデアがほしいです。被災された方を応援するクリスマスカード等も引き続き募集しますのでご協力ください。



困り事や悩みを共有したい

一方、課題も出てきました。「お茶っこ」のボランティアには盛岡などから2時間かけてバスで来る人もいて負担が気になります。もっと地元の組合員の力を集めなくては…。今、サロンは平日の昼間に行われますが、土日や夜を望む声も高まっています。被災した人が参加しやすいよう、より多くのサポートが求められるところです。

被災地域の組合員もがんばっぺし

震災から2年。「地域の人が自主的に」「自立」できるような支援」という言葉が使われ始めました。でも考えてみたら、支援したいと始めたのは自分たちです。「自立」が精神的にも経済的にも無理な人がいることも、心にとめたいです。特に、生活再建が難しい高齢の方には、ますますそばで支えることが求められるはず。これまで続けてきた活動をベースに、困り事や悩みを共有し、寄り添うことが大切です。そしてそれこそが、生活協同組合だからできることだと思っています。



“お茶っこ”仮設住宅のお茶会。いわて生協の組合員が開くサロンに、ツアーで訪問しました。(2011.6)

いわて生協の移動店舗車導入にあたり、コープあいち活動支援募金から100万円を寄贈。



いわて生協の移動店舗車が仮設住宅をまわる。

仕事をつくる

「林農海」と人が元気になること

産直グループ有限会社（支援事業企業組合）

うえのたかお
上野 孝雄さん



「林農海ワーカーズコープ」オープン時にはコープあいち職員もお手伝い。(2013.3.7)

育てることを生き甲斐に

「林農海ワーカーズコープ」がオープンしました。ここは仮設住宅でくらす人達が作った家庭菜園の野菜や、魚介類の産直所です。

仮設住宅では、家も仕事もなくし、こもってしまいがちな人が多い現実があります。津波の被害を受けた土地を耕して、そういう方たちにお貸ししています。野菜を作ることで、外に出たり、人とコミュニケーションをとるきっかけにできたらという考えですすめてきました。

直売所で毎日自分で作ったものを自分で値段をつけて並べる、そんなことが新たな生き甲斐につながればと思うのです。育てる大変さや、安全・安心な食への思いも共有したいと思います。地域コミュニティの再生をめざしカラオケルームも作ったんですよ。

自慢の海の幸を復興のかけはしに

コープあいちのみなさんとかかわりは、「見学や旅行」だったからお断りでした。「そうじゃない。地元のことを手伝いながら交流するんだ」と聞いてうれしかったですね。こんなふうに被災地をはげまし続けてくれるところは他にありません。みなさんの気持ちは、私たちの中につながっています。「何かあったときは、自分たちもこうありたい」という理想になっています。

だからこそ、前を向こう、自立しようと思うんです。私は震災前から「産直グループ」として、この地域の海の幸を紹介してきました。利益を求めるだけでなく、正直で安心な海の幸の販売を大切にしてきたんです。その思いは今も変わりません。むしろ、被災地の「林農海」の復興につながる海の幸を育てなくてはという思いが強くなっています。組合員のみなさんにも、自慢の海の幸を届けていきたいです。



田中さん（左）

たなかたけお
田中 和範さん
コープあいち組合員

私の復興応援の ありかた

昨年、支援ツアーに参加して、被災された方とかかわり方を模索していました。私は、産直センターの上野さんが取り組む「被災して漁業ができない方たちに、生きがいを持ってもらう」農業支援、漁業支援に大変興味を持ちました。

今後は、大船渡に比較的長期に滞在し、被災者の方とともに協働し応援できたら、もっとお役に立つのではないかと考えています。

未来ある街をつくっていく人を育てる

豊かな体験から子どもたちに希望を

仮設住宅の交流会には食材や道具を、大船渡市内の小学校には太巻きづくりの食材をコープあいちに提供していただきました。「この一年で思いに残ったことは？」という子どもたちへの問いかけの第一位がこの太巻きづくりでした。それほど子どもたちの印象に強く残った体験だったんですね。

こうした「子ども」に関する支援が、「絆プロジェクト三陸」の活動の一つ。パーベキューなど親子で参加できるイベントを企画したり、お笑い芸人やミュージシャンのステージをプロモートしたり。上位チームがプロ野球の球場でプレーできる少年野球大会も催すなど、いろいろな体験ができる機会を増やしたいと考えています、私も父親ですから…。活躍する著名人を身近で観ることで、ああいうふうになりたいと夢を持つきっかけになればと思います。

若者が生活できる仕事が必要

二つ目の柱が「起業家」育成です。地元での起業をサポートするもので、昨年は12組を送り出しました。この街には仕事が必要です。もともと高齢化や若者の流出といった問題があり、そこへ起きたのが震災。新しい産業で仕事を生み、若者が生活できる街にしたいと考えます。私自身、津波で被災しましたが、それでも海が見えないと落ち着きません。ここで育った若者たちも三陸の海が好きだと思ってくれます。近所と顔なじみで、町内会はいざという時に力を発揮する。そんな田舎の良さに仕事加われば、きっと若者が生活できる街に再生できると思います。

震災の経験を全国に生かせる ネットワークを

さらに、日本全国で「防災組織」のネットワークをつくりたいと考えています。各地で自然災害のリスクは高まっています。私たちは震災の経験から安否確認、避難所



子どもたちにクリスマスプレゼントを。(2012.12)



気球イベント「空を見上げて」。(2012.9)



みんなで大笑い、吉本おでかけ花月in甫嶺・龍昌寺。(2012.9)



さとうけん
佐藤 健さん

（プロフィール）
大船渡プレハブ横丁で整体院を経営。震災後、自宅を失い避難所生活を送りながらも、陸にあがった船を撤去する活動などを行い、臨時災害FM局の運営を経て、2012年に「絆プロジェクト三陸」を立ち上げました。

三陸の幸・サンマを復興の柱に

鎌田水産株式会社 営業部係長

山口 優希さん

マリン・エコラベルのサンマを生かす

鎌田水産のサンマは「マリン・エコラベル＊」認証。資源保護を考えて漁獲しています。現在、このサンマを使った商品づくりに力を入れているところ。すり身、干物、蒲焼きなどサンマを手軽にたくさん食べていただけるものを考えています。今、新しい加工場も建設中。これが地元の仕事づくりの一助になればと思います。私たちがめざすのは漁獲から水揚げ、加工、流通まで一貫して行うこと。自社で生産管理しつつ、よい商品提案をしていきたいと考えます。



建設中の新工場。

た2槽の船による水揚げが少しあり、市場出荷もできました。7月には全職員を呼び戻し、再スタートしました。大船渡ではまだまだ先の見えない水産会社もあります。一部の会社だけが復興しても、水産業としてはやがて衰退してしまうでしょう。互いに手を取り合って大船渡全体の水産業を盛り上げていけたらと思います。

震災は苦しかったけれど、これを接点にいろいろな付き合いが広がりました。コープあいちとも、震災後「何か取り組めることはないか」という問いかけから、つながりが深まっていきました。ピンチをどうチャンスに変えていくか。それが私たちの課題です。

水産業全体で盛り上がっていったら

私たちの会社は震災後5月に一部の業務を再開。津波に流されたものの難を逃れ



さんまを選別。



＊マリン・エコラベル：水産資源と海にやさしい漁業を応援する制度。資源と生態系の保護に積極的に取り組む漁業を認証し、その製品に水産エコラベルがつけられます。

食をつくる

産業再生にはオリジナルをつくる力が

さいとう製菓株式会社 専務取締役

齊藤 賢治さん

みなが元気になる方法を考えるとき

2年前、本社や和菓子工場、直営店は津波で流されましたが、「かもめの玉子」の生産工場は残り



誰もしていないことに挑戦していく

る方法を考えてこそ、全体が盛り上がるのではないのでしょうか。

「かもめの玉子」の秘密は「あんこ」にあります。考案したのは私の父で、勉強強をして昭和20年代半ばにつくりました。当時、あんこの中に卵やミルクを入れるのは邪道。しかし、父は固定概念にとらわれず、新しい味を生み出したのです。

みなと同じでは振り向いてもらえません。リスクが高く失敗も多いけど、誰もしていないことをしないと。そんなところに被災地の産業復興のヒントがあるのかもしれない。



被災したさいとう製菓。

ました。一方では、商品を生産できなかったり、業務を再開したものの将来の見通しが不透明という会社もあります。事業再建のため補助金を利用したくても、条件に合わないケースがほとんどです。野球は4番バッターだけでは成り立たないように、1番から9番までそれぞれに役割があって全員にやるべき仕事があります。産業も同じ。みなが打て



商品を復興支援につなげて

商品案内では、被災地が産地や製造者の商品に「がんばろう日本」マークをつけて案内をしています。これまで602の商品で約785万点（約25億円）の利用がありました（コープあいち、3月20日時点）。

岩手県や福島県では、被災後、人口の減少に歯止めがかからない状況です。復興のためには、やはり産業があり、人が集まって活気が戻ることが必要。そのためには被災地で作っている商品を利用することが大切です。

これだけ多くの注文をいただき、被災地の復興支援へ大いにつながっていることは間違いありません。



山中 賢太郎さん（店舗支援グループ）

被災地の惨状を見て

震災直後の3月15日、支援物資を持った第1号車に乗り込みました。宮城県仙台市山王町本部へ行き、被災地の想像を超える悲惨な光景を見ました。

絆フェアを復興支援につなげる

愛知に戻り「店舗でもできることを」と、毎月第4週の土日に「絆フェア」を開催、東北のメーカー・生産者への支援を行ってきました。12年度2月末までで26の製造者・取引先からの商品を取り扱い、約2万点の利用がありました。また、産地直送企画として、大船渡より生サンマ、福島県の桃の販売にも取り組みました。また、店頭では支援だんごとして、通常価格に1本10円の支援の理解をいただき、みなさんに利用していただいています。大船渡のボランティアグループとの絆を大切に、支援活動を継続してきました。

希望を与えられるよう今後も支援を

震災から2年、現地では地域ごとに復興の速度が違い、全く手が付けられていない地域もたくさんあります。

コープあいちの復興支援の取り組みは、現地のみなさんに本当に希望を与えています。これからも、東北地域のメーカー・生産者からの熱いメッセージを、絆フェアでお知らせしていきます。



店舗の絆フェア。

いわて生協の「復興支援地産地消フェスタ」に参加し、売り上げの一部は移動店舗車の購入支援としてカンパした。山中さん（右から3人目）

祭りは希望の一步。地域再生の力に

認知症にやさしい地域支援の会会長

菅野不二夫さん

物資を送った人の気持ちも届けない

私とコープあいちの出会いには2011年7月。「認知症にやさしい地域支援の会」の介護家族交流会でした。コープあいちの組合員からの支援タオルの配布先を紹介してほしいと、一緒に陸前高田市内の介護施設や

街が一つになる祭りを

仮設住宅などへ届けました。市は壊滅的な被害を受け、食べ物も満足になかった状態。支援物資がどういう団体から届いたのか市民には全然分かりません。私はタオルに「遠い愛知から組合員のみなさんが私たちとの心の絆として送ってくれた」という文を添えました。送った人の気持ちが伝わるのが大切だと思います。

クリスマス前、ある仮設住宅では、入居者全員からアンケートを取り、いま何が必要かを調べました。要望に沿ったものを届けられたのは、コープあいちの協力があつたからです。「希望を叶えてもらって本当によかったねー」とみんなで喜び合いました。一人ひとりに合わせた支援の大切さを実感しました。

震災後、同じ町内だった人が離散し、伝統の8月の七夕祭りを行うのが大変になりました。以前は町内会が集まって「祭り組」をつくり、山車を花で飾ったり、笛や太鼓の練習をしたものです。祭りがないと元気がでません。なんとか続けたいと、支援を受けて開催にこぎつけ、2年目は参加する町内会も増えました。コープあいちからもボランティアが来て、祭りを支えてくれました。

ただ、私の子どもと比較すると、地域と祭りとのかわりが薄くなったと感じていました。準備の段階から子どもや若者の姿が減っていたのです。もともと高齢者が多く、震災で精神的にも経済的にも厳しい状況になってきました。かつての市街地も今は荒野のよう…。残った建物さえ取り壊しがすすみ、山車が練り歩いたあたりは地盤のかさ上げで盛土工事が始まりました。夜も灯りはなく、恐いくらいに静まりかえった街を見下ろすと、もしかしたらもう再生した街並を目にできないのでは…という気になります。



菅野さん



荒町の七夕祭りの山車（小）が再興。本来はもっと大きな山車ですが、津波により流されてしまいました。後方には被災した陸前高田市役所。（2012.8）

しかし、嘆いてばかりもいられません。祭りが前進すると希望の一つになると思うのです。受け継いできた伝統を後の世にしっかり伝えていくこと。それが復興への一歩、地域づくりの柱になると考えます。

人として、生協で働く者として

職員によびかける「ちゃばしらの会」

私たち「ちゃばしらの会」は、コープあいちで働く仲間のボランティアネットワークで、1997年の日本海重油流出事故の重油回収ボランティアをきっかけに98年に設立されたグループです。

2000年の東海集中豪雨のときには、全部署に呼びかけて現地でボランティア活動を行い、2004年の新潟県中越地震のときはトラックで食器を届けました。東日本大震災後は、福島県と岩手県に食器を届けたほか、物資を送りました。「被災地のためになにかできないか」という職員の思いを行動へとつないでいます。

生協の仲間の協力で

今後もボランティア活動を

今回の支援でポイントとなったのは、東日本大震災の被災地は遠方で、継続した支援をするには体力、費用とにもかなりかかることでした。

支援に必要な費用については、「ちゃばしらの会」の貯えや、生協・労働組合・赤い羽根募金などからの支援、そして職場の仲間からの募金でまかないました。また、車両の貸し出しに応じてくれた生協の存在も大きかったです。

お届けした物資は、サロン塩草を中心に集めた陶器類や、冬に向けて使い捨てカイロ、

職員ボランティアグループ「ちゃばしらの会」

浅井英雄さん

毛糸などです。生協の仲間からの提供を受けました。

この取り組みをとおして「ちゃばしらの会」の支援活動の課題も見えてきました。物資や費用を集めていることがすべての職場に伝わっていない状況もありました。

課題克服を働きかけていきながら、引き続き日常のボランティア活動を中心に取り組んでいきたいと思えます。



ちゃばしらの会、瀬戸物お渡し。



赤崎町山口地区のみなさんと「ちゃばしらの会」のメンバー。浅井さん（前列、左から2人目）



荒町の七夕山車につける花飾りを、コープあいち組合員がつくる。（2012.7）

愛知でくらす

被災避難者の今。歩き出して

住み慣れた故郷を離れて愛知へ

私が住んでいた塩原市は、栃木と福島との県境。原発から100キロ離れており、「放射能汚染は大丈夫」だと思っていました。放射能に関する情報が混乱するなか、「あのとき子どもを放射能にさらしてしまったかもしれない。あのときも、あのときも・・・」と不安はつのるばかり。さらにオムツなどの子育てに必要な物資も不足し、真つ赤にはれた子どものおしりを見て、泣くことしかできませんでした。夫と何度も話し合いを重ね、考えて、考えて、すべてを捨てて栃木を出てきました。

**気持ちを打ち明けられる
出会いに支えられて**

やっと愛知にたどり着いた直後は、寂しさや辛さから、ふさぎこむ毎日でした。気持ちを打ち明けられる人もいません。「なにがつながろう日本だ！」と思うこともありましたが、しかし、愛知県被災者支援センターで同じ自

主避難者の方や、支えてくれる支援者のみなさんと出会い、少しずつ心をひらくことができるようになってきたのです。

**避難者どうしの思いをつなげ
一人ひとりの問題をみんなで考える**

自主避難者は「避難地域ではないけど避難してきている」と、孤立する方も多くいます。そのため、東北、福島、関東などでくらず、避難者みんなで思いを話し、共有しあう場温かい場にと、「ゆるりつと会」という交流会も開いてきました。そのなかで、避難者はそれぞれが抱える問題が解決されないまま、社会から忘れられてしまうことに焦りを感じる人も多いことがわかりました。



解決のための法律知識が私たちに
は不十分。そこで専門家に協力いただき、一人ひとりの問題をみんなで考え支

井川 景子さん

えあい、解決にむけて取り組む必要性を感じました。そして、仲間といっしょに原発事故被害者支えあいの会「あゆみR・P・Net」を立ち上げました。「原発事故子ども・被災者支援法」を被災者の実情にあったものにするための活動や、損害賠償などの保障問題の解決などを進めていきます。

ひとりでは小さな声も、避難者のみなさんがひとつになることで、大きな声となります。原発事故被害に、地域や県の境はありません。みんな同じ被災者として一緒に取り組んでいきたいです。

前だけをみて進んでいく

震災から2年。私は支援者のみなさんに守られて過ごしてきました。支援者の温かい言葉や、がんばる姿をみて、「私も立ち上がらなければ」という思いを強くしました。

避難者どうしがつながること、そして避難者を支えてくれる人理解してくれる人がたくさんいるということを、避難者にもっと呼びかけていきたいと考えています。

愛知で被災者を支えて

愛知県被災者支援センター

センター長 栗田 暢之さん

**県と市民がつながり
避難者をサポート**

愛知県が呼びかけ、NPOなど市民団体が運営を担う「愛知県被災者支援センター」。その役割は、愛知県への避難者と、その生活再建を願う県民・企業を結ぶことです。

各地でさまざまな交流会やイベントなどを実施したり、くらしに関わる情報を発信しています。被災者を受け入れている市町村とも連携しています。

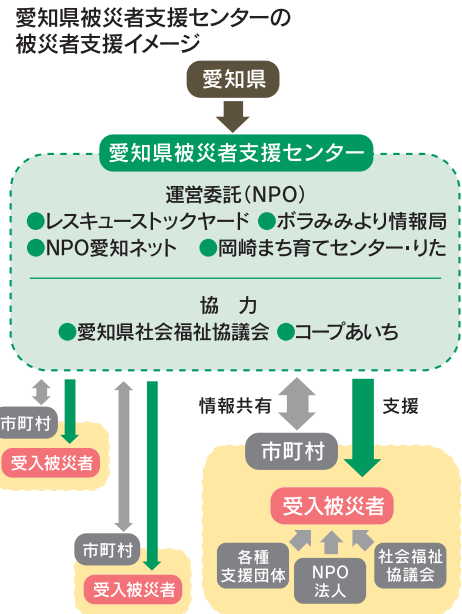
被災者が抱える不安

東日本大震災により全国へ避難している

**避難者の「今」に関心を持ち
一人ひとりにどう寄り添うか**

方は推計で約10万人ともいわれ、状況や思いは避難者一人ひとりで異なります。その中で共通しているのは、将来への不安。なかでも住宅問題は切実です。住む場所がはつきりしないと、仕事や子どもの学習環境もどうなるかわからず、将来の展望を描けない状況です。

震災から2年。今後の支援センターの役割は、心のケアや生きがいづくり、就労支援などを充実させていくことです。支援センター実施のアンケート(表1)によると、まだまだ多くの支援が求められているのが現実です。



「愛知県被災者支援センター」は4つのNPO法人が県から委託を受けて運営にあたり、コープあいちと愛知県社会協も協力団体として参加しています。

表1 これからの生活に必要な支援(複数回答)

住宅	38.2%
生活用品	26.8%
生活資金	7.6%
健康・福祉	34.4%
教育資金	15.3%
子どもの学習	25.5%
子どもの進学相談・情報提供	20.4%
就労支援	26.1%
被災地復興状況に関する情報提供	34.4%
支援制度に関する情報提供	36.9%
賠償請求に関する情報提供・相談	28.7%
二重債務等に関する情報提供・相談	5.1%
情報誌(あおぞら)の定期的発行	24.8%
避難者同士の交流支援	21.0%
身近な地域の医者や店の情報	36.3%
家族や子どもの病気など、いざという時に頼める相手や場所	22.3%
なんでも気軽に話したり、相談できたりできる相手や場所	26.8%
離れて暮らす家族の食生活・健康、日常生活支援	28.7%
自分ができることを見つけたい	17.2%

※1 愛知県被災者支援センターニュース「あおぞら」2012年10月25日発行号より



飛島村提供の米を避難者へ配達。(2011.12)



コープあいちの配達力を生かして、愛知への避難者へ布団を配送。(2011.4)



子どもたちの笑顔を守りたくて。



学んだことを 地域で生かす



「自分らしく歩いていきたい」
そんな想いが、明日を切り拓く力になるのではないだろうか。

陸前高田市役所前、手を合わせて想う。

交流しながら 無理のない支援を

東北支援グループ本山
吉留明美さん

毎月のバザーで災害支援

阪神淡路大震災以降、生協生活文化会館で毎月バザーを開催しています。東日本大震災以降は、支援ツアーで知り合った大船渡市山口地区のボランティアグループと連絡を取りながら、必要とされる物資や仮設住宅でくらすみなさんが集まってお茶会をするための飲み物やお茶菓子、通信用のハガキや切手などを届けています。マスコミの報道からはいくつか伝わってきましたが、現地の方からお話をうかがうと復興にはまだまだと感じます。

小さなことでも やれることを

バザーには多くの方が参加しています。被災された方を



毎月第1水曜日に、支援バザーを続けている東北支援グループ本山のみなさん。



思い「何かしたくても、どうしていいかわからない」そんな思いを抱えた方もたくさんいます。小さなことでいいんです。バザーの会場に「よかったらこれも使ってください」と物品を提供してくださる方もあります。コプ本山の店内に、書き損じたハガキや切手などを寄付してもらった箱も設置させてもらっています。無理せず続けられる範囲で参加をしてくれる方が一人でも増えて、活動が広がることを願っています。

できることから 被災地を応援して

コープあいち組合員 村田きみるさん

被災のなかでも… 気仙の人の「温かい思い」

気仙の人々は、「温かい」「我慢強い」「義理固い」地域の協力体制が強い」これが第一印象です。仮設住宅では断熱シートで温かく過ごせたといい、プランターで野菜を育て、苦しい生活のなかにも、喜びを味わう工夫をされています。また、家族を失った多くの人々が、それでもボランティア活動をしていました。



村田さんが描いた似顔絵。出合ったみなさんにプレゼントしている。

伝統的な先祖供養の祭りでは、津波被害の少なかった家では自宅を開放し、仮設の人々も集まって祭り組の山車の飾り作りに何日もかけていました。コープあいちツアーとの交流では、郷土料理でもてなしてくださる姿に恐縮したものです。



コミュニティを大切に

「災害があつたら這ってでもきてください。今度は私たちがお返しします」と言った気持ちが忘れられません。大都市ほど近隣の人々とのかわりが少ないといわれています。大災害時こそひとりでは生きていけません。私たちは、日ごろからあいさつを交わし、時には会話ができる関係をつくらせていきたいです。

もう繰り返させないために この街でふんばる

サロン塩草 田中 詔子さん

「安全」ではなかった 原子力発電

広島・長崎の被爆者のみなさんが、「再び私たちの苦しみを味わうことのないように」と核兵器の廃絶を求めている運動に、私も微力ながら協力してきました。

核兵器と同じ原子力で発電する原発は危険だと頭ではわかっていたつもりでも、やはり安全神話にだまされていたと思い、情けない気持ちでいっぱいです。

サロン塩草を拠点に 福島のためにできることを

東日本大震災以降、地域の交流の場として自宅で運営している「サロン塩草」を拠点に、「せともの」の街からせとものを送ろう」と茶碗類から始まり、マフラーやひざ掛けなど、



福島県国見町のみなさんと瀬戸市民が、テレビ通信で交流。(2011.10)



原発による福島県のみなさんの苦しみは、日々深まって行くばかりです。福島県のみなさんと共に「再びどこにもフクシマを繰り返させない」ため、その時々に見えることをこの街のみなさんと一緒に続けていくつもりです。

語り部として

震災体験をまちづくりに生かす

陸前高田市から県外避難

鶴島道子さん

ふさいだ気持ちが 人とのふれあいで前向きに

当時くらしていた陸前高田市で被災。海の異変を察知して、両親を連れ必死で高台へ避難しました。

約1カ月間、両親と避難所でくらしていましたが、親の持病の薬が入手できない状況に、愛知県への避難を決めました。これまで培ってきた「つながり」を全部捨ててしまったという思いに



愛知で自分の経験を生かしてほしい。

苦しみ、ふさぎこみましたが、被災者の交流会で自分と同じ思いをしている人や、熱心に応援してくれている人とふれあうことで「前向きになろう」という気持ちになってきました。

「震災の語り部」として愛知での まちづくりを考えていく

生かされた者として、私の使命は「震災の語り部」となること。愛知もいつ災害がおきるか、人ごとではありません。陸前高田の後方支援をしつつ、愛知でできたつながりを大切に、行政も巻き込んだ地域づくり、まちづくりと一緒に考えていきたいと思っています。



いつもつながっているよ！ 商品の利用をすすめながら

小牧センター(当時)

熊澤勇樹さん

相手を想った取り組みが 伝わっている

私は祭りボランティアに参加する前、よそから来た人がお祭りに参加することがどう思われるのか？また、タオルやクリスマスカードを集めてそれを贈ることが単なる自己満足なのでは？と感じることが多くありました。しかし、現地の方と直接お話しをする中で、初めてこうした取り組みを喜んでいただけているのを実感し、相手を想った行動は、伝わっているというのがわかりました。このことを愛知に戻ってから、組合員や職場の仲間に伝えました。

愛知もつながっている！ と言いたい

交流を通して感じたのは、これからもずっとつながっていなければならないということ。現地にはなかなか行けません。募金もそうそう

は続きません。でも、全組合員が協力できることのひとつが「がんばろう日本」のマークの商品を利用しただけでいいと思います。



夏まつりで焼きそばの炊き出し。
熊澤さん(左から2人目)

東北の商品を買っていただければ、東北に仕事が生まれます。買っただく商品が増えれば活気が生まれ、復興の後押しになります。また、東北の商品を1週間に1点でも買おうと思ったださる方は、毎週商品案内を見るたびに震災のことを忘れないでいてくれると思います。そうして、より長くつながっていられる礎ができるのではないかと考えています。

愛知県もいつもつながっているよ！と大きな声で言えるように、私はきちんと伝えがばります。

できることから

被災地を応援して

大船渡市在住、個人ボランティア

水野真一さん

今なお状況が変わる被災地

世間では「震災から2年」、しかし現地では「三回忌を迎える」と言っています。

被災地は毎日状況が変わります。好転したように見えて、実はそうではないことが多く、例えば自宅を再建されて仮設住宅を出ていかれた方が、新しいコミュニティになじめず仮設住宅の集会所に通ってくることもあります。



組合員と交流。

1枚のハガキで応援できる
ツアーに参加されたみなさんに「50円の応援隊になってください」とお願いしています。現地でひとりでも名前と住所を聞き、友達になって、愛知に戻ったら1枚のハガキを出す…ハガキを受け取った方は「私は独りじゃない。応援隊がいる」と喜ばれます。

自分ができる方法で支えて

現地に来られない方は、クリスマスカードや七夕カードに参加いただくことで、後方から被災者を支えてください。現地に来られる方は、ぜひ自分の目で見えて確かめて「今、何ができるか」を考えてほしいです。



子どもたちに 伝えることの大切さ

共済グループ

岡田亜木子さん



椿のストラップ

2012年夏、コープあいちの復興支援活動「想いをつなぐ地域交流with三陸気仙」に参加しました。陸前高田では、瓦礫の山や一本松を背景に、ボランティアガイドから当時のようすをうかがうことができた。大船渡では「おもてなし隊」のみなさんと出会い、椿のストラップ作りやお祭りのお手伝いをさせていただきました。大船渡市の花、椿をモチーフにしたストラップを作り活動資金にしているそうです。



岡田さん(中列左から3人目)、作文を書いた萌(めぐみ)さん(後列左から4人目・ピンクのTシャツ)と、いっしょにストラップを作った友人たち。

三陸では人の優しさ、あたたかさ、心への復興へと努力される力強さ、心に強さを感じました。また、行き帰りに他生協の支援活動バスを見て、全国の生協で同じように活動していることが素晴らしいと感じました。生協で職員として働けることがうれしいと、心から思いました。

戻ってから、子どもたちや近所の友人に自分の体験を話したところ、「一緒に「椿のストラップ」を作ることになりました。子どもたちは夏休みの宿題の作文に「椿のストラップ作り」や母の体験を通して自分たちが感じたことを書いてくれました。実際に現地には行っていない子どもたちですが、言葉や写真を通して被災地への思いを綴った作文を読んで、伝えることの大切さを感じました。

小さな取り組みですが自分のできることがあれば、被災地の方々の復興を祈りながら積み重ねていけたらと思っています。